

ディケンズ版『種の起源』

『我らが共通の友』における遺伝との闘争

長谷川 雅世

1859年、ダーウィン (Charles Darwin) の『種の起源』 (*The Origin of Species*) 上梓という西洋社会にとっての衝撃的な出来事が起きた年である¹。ディケンズ (Charles Dickens) の『我らが共通の友』 (*Our Mutual Friend*, 1864-5) はその5年後に連載が始まった。両者について、アクロイド (Ackroyd) は、ダーウィンの著述にはディケンズの小説の影響が読み取れるが、ディケンズの小説も同時代の科学や地質学の知見に負うところが大きかったと述べている (698)。また、ディケンズの書斎には『種の起源』があったし、ディケンズ編集の雑誌 *All the Year Round* には『種の起源』の書評“Natural Selection” (7 Jul. 1860) やダーウィンの進化論に言及している“Transmutation of Species” (9 Mar. 1861) が掲載されている。さらに、ディケンズはダーウィンのライヴァルであるオーウェン (Richard Owen) と親交があり、オーウェンの名は『我らが共通の友』にも登場している。これらのことから、ディケンズが『種の起源』に強い関心を持っていたと考えられる。

実際、これまでピア (Beer) やレヴァイン (Levine) やフリント (Flint) によって、ディケンズとダーウィンやダーウィニズムとの関連が考察されている。しかし、このような研究は決して多くなく、様々な観点から十分に考察されてきたとも言えない。当然、『我らが共通の友』とダーウィンとの関係を論じた研究も多くない。確かに、フルウィーラー (Fulweiler) は、この小説が生存競争と自然選択に見られるダーウィンのマルサスの自由放任主義への批判であることを論じ、ギンデル (Gindele) は、この小説が『種の起源』の思想を体系的に取り入れた最初の小説であり、ダーウィンの提示した欲望の概念を描いていることを明らかにしている。しかし、これらの少数の研究だけでは、『我らが共通の友』と『種の起源』との関連性が満足に論じ尽くされているとは思えない。

そこで本論文では、『我らが共通の友』を『種の起源』との関連から検討する。その際に遺伝の問題を中心に考察する。というのも、フルウィーラーやギンデルの研究では、遺伝の問題が議論の中心にはないからである。しかし遺伝は、ディケンズの“Natural Selection”でダーウィンの進化思想の重要概念として取り上げられているだけでなく、『種の起源』に

よって再び脚光を浴びるようになったと言われる問題である。確かに、モーゲントラー (Morgentaler) は、ディケンズの作品群を遺伝の問題を中心に論じている。けれども彼は、ディケンズが西欧文学の潮流とは逆に『種の起源』の頃には遺伝決定論には興味を失っていたという前提から『我らが共通の友』を論じている。そのために、この小説における遺伝の問題を十分に議論しているとは言い難い。そこで本論文では、遺伝という観点からこの小説を考察し、そのうえで、この小説と『種の起源』の関係を明らかにする。

1

『我らが共通の友』には非常に多くの登場人物たちが登場し、ヒリス・ミラー (Hillis Miller) が言うように、彼らは相互関係の巨大な網の目を作り、誰もそこからは逃れられない (288)。例えば、主人公ではないが重要人物であるライトウッド (Mortimer Lightwood) の場合、彼はハーモン爺さん (Old Harmon) の遺産を手にしたボッフイン氏 (Mr Boffin) に雇われ、彼の弁護士としてハーモン爺さんの息子のジョン (John Harmon) の死体を確認しに行く。その際に、ライトウッドの友人であるユージーン (Eugene Wrayburn) が同行し、彼らは死体を引き上げたギャファア (Gaffer Hexam) の娘リジー (Lizzie) と出会う。そこから、ユージーンとリジーの結婚に至るまでの物語が始まる。さらに、ライトウッドは社交界の一員で、彼はヴェニアリング (Veneering) 夫妻の晩餐会でジョンのことを話題にする。その時から、ジョンに纏わる話が社交界の共通の関心事となり、社交界の人々は本来なら接点を持たないリジーなどの下層階級の人々と間接的ではあるが知り合いとなる。このように、ある人物が他の人物と関係を持つとその関係が更に他の人物との関係へと繋がって行き、最終的に、数多の登場人物たちによる広大な網状の相互関係が作られる。

しかも、その複雑な網状の相互関係は、具体的には、捕食者と被捕食者の関係である。登場人物たちは、繰り返し、他者を食らう生物、特に猛禽や猛獣として描かれる。最も顕著な例はテムズ川で死体漁りをするギャファアである。彼は何度も「猛禽」に例えられる。彼が腐肉を漁る猛禽であることを印象づけるために、溺死体はこの小説の原稿や『荒涼館』 (Bleak House, 1852-3) で使われていた“Found Drowned”ではなく“Body Found”と表現され (Cotsell 39)、「死体 (body)」という意味が強調されている。その他には、ギャファアの同業者ライダーフード (Riderhood) も「猛禽」と呼ばれ、彼の毛皮帽は「腐敗している犬や猫の溺死体のような」 (148) と語られる。ボッフイン氏をカモにしようとするウェッグ (Wegg) の場合は、「羽を広げながら獲物の上で羽ばたいた」 (188) と描写され、社交界の

ヴェニアリング夫人も、彼女の「鷲のような鼻と指」(10)が強調される。フレジビー(Fledgeby)については、「羽毛が生えそろう(fledge)」という言葉を想起させる彼の名前自体が鳥を内包し、強欲な金貸しである彼は、自分の利益に関わることだと「馬ヒル」(267)のように執着する。さらに、ラムル(Lammler)夫妻と共に財産目当てでポズナップ(Podsnap)嬢との結婚を計画しているとき、フレジビーは籠から出された鳥を追う「レトリバー犬」(266)に例えられる。ラムル夫妻については、彼らはお互いが金持ちだと偽りながら結婚したが、このことは「お互いに噛みつき、噛みつかれ合った」(125)と表現される。

捕食動物に変化させられるのは悪玉だけではない。依頼人を待ち構えるライトウッドの弁護士事務所は、「猛禽の高巣(eyrie)」(86)と表現される。ユージーンは、結婚する確固たる意志もなく労働者階級のリジーを追い回す自分自身を「けだもの(Brute Beast)」(697)と呼ぶ。さらに、レン(Jenny Wren)は貴婦人たちを見本に人形の衣装を作る。彼女はそのことを、「貴婦人を裁断して仮縫いし(cut her out and baste her)」、「彼女をこき使う(I am making a perfect slave of her)」(436)と述べる。レンの人形作りには奴隷の酷使のイメージがあり、遠回しながらも、搾取者という捕食者の姿が読み取れる。

このように、この小説の人間関係は、ボッフィン氏が言う「バリバリ食うか食われるか(either scrunch them, or let them scrunch you)」(464)の関係である。この小説の舞台である英国には、ライトウッドが文明化の兆候と呼ぶ「食い合い(eating one another)」(816)が顕著に現れている。

一方、ダーウィンは『種の起源』で“the mutual relations of all organic beings”(129)について考察した。その中で、彼は自然界の秩序について次のように語る。

We behold the face of nature bright with gladness, [...] we do not see, or we forget, that the birds which are idly singing round us mostly live on insects or seeds, and are thus constantly destroying life; or we forget how largely these songsters, or their eggs, or their nestlings, are destroyed by birds and beasts of prey [...]. (116)

ダーウィンは、一見繋がりが無いように見える場合でもあらゆる生物は相互依存の関係にあり、その中で生物たちは食うか食われるかの「生存闘争」を繰り返していると述べている。

ディケンズは『我らが共通の友』の登場人物たちを広大な網状の相互関係に置き、彼らの相互関係を捕食の関係として描いた。この人間社会は『種の起源』が描く自然界に酷似している。というよりも、ダーウィンの自然界を敷衍して、ディケンズは人間社会を描いたと考えられる。ダーウィンは『種の起源』で、人類についてはほとんど触れていない。しかし、マルクス (Karl Marx) は、ダーウィンは『生存競争』を伴う彼のイギリス社会を、動植物界のなかでも再認識している」(203) と言い、『種の起源』は「歴史的な階級闘争の、自然科学的基礎」(467) と述べている。マルクスのように、ダーウィンの自然界に人間社会の姿を見出した者は多い。ディケンズもその1人だったのである。

2

『我らが共通の友』でディケンズは、ダーウィンの自然界の概念を基にして人間社会を描いた、つまり人間を主人公にした『種の起源』を書いたと言える。その中でディケンズは、ダーウィンの進化論での重要概念である遺伝の問題を取り上げている。ただし、ディケンズは現在で言うような厳密な意味で遺伝という概念を使ってはいない。彼は親から子への継承と親の子に及ぼす影響力という遺伝の特徴を利用し、遺伝を象徴化して描いている。例えば、親が子供の未来を決定しようとする遺言も、モーゲンタラーが言うように遺伝との類似性を利用して、遺伝の一形態として象徴的に使われている(176-77)。ゴールド (Gold) も、ユージーン (Eugene) の名前に“breeding and inheritance”(269) を想起してしまうと述べる以外には、ダーウィンや進化思想に言及することはないが、親が体現し子供を束縛する過去に遺伝との関連を読み取っている(258)。

しかしディケンズは、ダーウィンの描く遺伝の概念を率直に受け入れているわけではない。むしろ彼は、ダーウィンの遺伝についての考えに対して、「遺伝」と対峙し格闘する人物を通して、否定的な態度を示している。そのことを、主人公の4人について検討してみよう。まず、ベラ (Bella) について。ベラは、気位が高く俗物根性の塊のようなウィルファー夫人 (Mrs Wilfer) とお人好しのラムティ氏 (Mr Rumty) の娘である。彼女は、「お金が好きで、お金が欲しい。お金が欲しくてたまらない」(37) と言う。ポッフィン邸で裕福な生活をするようになってからは、結婚相手に求めるものは裕福さだけだと公言するようになる。しかしその一方で、病気のジョニー (Johnny) に対する彼女の「とても優しくとても自然な」(327) 態度から分かる通り、彼女は優しい心をも持っていた。ベラは母親の性質と父親の性質の両方を受け継いでいたのであり、当初のベラの中では、母親の性質

が優勢であった。だが、ポッフィン氏たちの努力によって、ベラは拝金主義の浅ましさを知り、愛の真価を知るようになる。その結果として、ウィルファー夫人が「乞食 (a Mendicant) 」 (672) と呼ぶジョンの献身的な良き妻となる。彼女は、「君がお父さんの娘であることに議論の余地はないが、君がお母さんの娘だということはこの先も信じることができないだろう」 (808) とジョンが評する人物になった。彼女は最終的に、母親の性質に打ち勝ち、父親の良き性質を発展させた。

ジョンの場合は、遺伝が遺産に象徴化されている。ジョンの父親のハーモン爺さんは、お金以外のものには、家族にさえも愛情を見せない守銭奴だった。その父親がジョンを遺産の相続人にし、ベラと結婚することを相続の条件にした。これは、彼が守銭奴としての自分の性質をジョンに継がせようとしたことを意味する。なぜなら、ジョンが初対面の高慢で我儘なベラと結婚し遺産を受け継ぐことは、彼がお金でベラを買ってお金のために彼女と結婚し、「父親と同じような酷いお金の使い方をすることになる」 (372) からだ。ところが、ジョンはロークスミス (John Rokesmith) としてベラを観察しているうちに彼女を本当に愛してしまい、この遺産相続の条件に苦しめられる。もしもロークスミスとしてベラに求婚すれば、彼を父親の店子と蔑む彼女に拒絶されるのは必至であり、もしも自分がジョンだと正体を明かして求婚すれば、父親の思惑通りになるからだ。しかし、ポッフィン夫妻との計画が成功し、ジョンはロークスミスとしてベラと結婚することができた。さらに、ベラの愛情が金銭とは関係のない本物であることが確信できたとき、ジョンは正体を明かして父親の遺産を受け継ぎ、それを自分たちと彼らの身近な善良な人々の幸せのために使った。ジョンが受け継いだことで、「惨めさ以外には何ももたらさなかった富」 (366-7) が、ポッフィン氏の言うように「暗闇で長い間錆びついていた後に、輝きを取り戻した」 (778) のである。このように、ジョンは父親から受け継いだ遺産を惨めさではなく幸せをもたらすものに変えた。

リジーの場合は、父親の職業技術を受け継いだ。リジーの父親は、テムズ川で溺死体から金目の物を奪うことを仕事にしていた。リジーは、小船を操作して父親の仕事を手伝っていたが、彼女は父親と違い、死体漁りという行為に嫌悪と恐怖を抱いていた。しかし父親の手伝いをする中で、彼女は小船を巧みに操り死体を上手く引き上げる技術を身につけ、父親から技術を受け継いでいた。この技術は、彼女が愛するユージーンがヘッドストーン (Headstone) に殴られて川に落ちたときに役に立つ。川に漂うユージーンを助けることは、一瞬の時間の無駄も許さない困難な仕事だった。しかし、彼女の「慣れた手さばき」

や「慣れた足さばき」や「慣れた目」(699)が、ユージーン救出を可能にした。彼女の経験が、「最後には良いものになった」(699)のである。リジーは、死体漁りを手伝っていた労働者階級の娘が紳士のユージーンと結ばれることなどないと断言していた。しかし、彼女の負い目であった技術による救出が、最終的にリジーをユージーンとの結婚へと導いた。彼女はユージーン救出を通して、父親から受け継いだ技術を、忌まわしいものから良きものに変化させた。

ユージーンは上流階級の四男坊である。長兄は「一族の地所」の「後継者」となるべく生まれてきたと見なされている(146)。それだけでなく他の息子たちも、父親によって「生まれる前からそれぞれの歩む道を決定されていた」と語られている(146)。ユージーンに用意されていたのは、法廷弁護士になり、財産つきの女性と結婚するという人生である。ユージーンは、生まれる前から父親が決定していたものを受け継がされた結果、無気力な人間になった。しかし彼は、瀕死の状態に陥ることで一種の通過儀礼を経験し、その後、今までには見られなかった情熱を持ってリジーとの結婚を望む。さらに、結婚式の直後にリジーがユージーンの真の姿だと言った「意思と精力の宝庫でそれを最大限に活用できるだろう人物」(754)になって、「彼の妻がどれほど彼を変えてくれたのか」(811)を証明しようと決意する。ユージーンは、リジーとの結婚を自らの意志で決めることで、父親によって作り出された無気力な自分を変えたのである。

このようにディケンズは、各自が親から「受け継いだもの (inheritance)」に「遺伝 (heredity)」を象徴させたうえで、主人公の4人にそれと格闘させ、彼ら自身の力でそれを克服させた。確かに、ベラの場合、「環境さえ良ければ (under favorable conditions)」(372)生来の美德を十分に発揮できた彼女が、ジョンの良き妻になったのは、ポッフィン氏が守銭奴の振りをして彼女に環境の変化をもたらした結果である。それゆえ、ベラの変化は環境の力だと思われるかもしれない。しかし、ポッフィン邸から追い出されたジョンの後を追ったのは、紛れもなく彼女自身の確固たる意思からである。彼女も他の主人公たちと同様に、己の意思の力で親から継承したものを変化させ、「遺伝」の力を乗り越えた。ディケンズはここで、「遺伝」が人間の存在の絶対的な決定要因ではないことを主張している。

3

主人公の4人は遺伝の性質を変化させてそれを克服した。それと同時に、彼らは自分たち自身をも変化させた。さらに、主人公たちのこの遺伝との格闘には、宗教的なイメージが

与えられている。例えば、ジョンは、父親死去の報を受けて帰国した日に金品を奪われる。このときに彼はテムズ川に投げ込まれ、溺死しかける。彼は何とか助かったものの、彼と共に川に投げ捨てられた航海士と間違われ、死んだことになった。そこで彼は、ロークスマスと名乗り、父親が結婚相手として指定したベラを観察した。その結果、ジョンは彼女を愛して結婚し、彼女の愛情が本物であることを確信した後に自分の正体を明かした。このときに、彼は、愛していない女性と結婚して遺産を相続することで父親の性質を受け継いだジョンではなく、愛する女性と結ばれた上で遺産を相続したジョンとして蘇った。彼はテムズ川の水に没した後に、新たなジョンとして復活したのである。ユージーンの場合は、彼は最初、ヴェニアリングの晩餐会で椅子の背に「生き埋め (buried alive) 」 (11) になったライトウッドの友人として登場する。彼は無気力で虚無主義的な人物で、リジーに対しても、彼女を追い回すだけで彼女との関係に何らかの決断をしようとはしなかった。しかし、恋敵であるヘッドストーンに襲撃されてテムズ川で溺死しかけた後、彼はリジーと結婚することを決意し、かつての無気力な自分ではなくなろうとする。サンダース (Sanders) が指摘するように、「浸礼 (immersion) 」がジョンとユージーンに 新たな生命或いは再生をもたらしたのである (188) 。また、ジョンやユージーンのように実際に水に浸かることはないが、ベラは我儘な守銭奴の娘から利他的で献身的な良き妻へ変化し、リジーは、彼女自身がユージーンに言っていた「あなたやあなたの家族とは相容れない労働者階級の娘」 (693) から、ユージーンに選ばれた「とても立派なレディー (the greater lady) 」 (819) になった。この2人の変化も一種の再生や復活である。

このように、ディケンズは、彼の他の小説にもしばしば見られる「洗礼 (baptism) 」を経ての「復活 (resurrection) 」や「再生 (regeneration) 」を、主人公の4人の変化を通してこの小説でも描いている。そのうえディケンズは、彼らの変化に宗教的な意味合いをより一層与えようと工夫している。例えば、ジョンとベラの再生では、ポッフイン氏が重要な役割を果たしている。彼は守銭奴のように振舞ってベラを改心させ、自分が相続したハーモン爺さんの財産のほぼ全てをジョンに譲ることで、ベラとジョンの再生をもたらした。このポッフイン氏は「ニコデマス (Nicodemus) 」という名を持っている。「ニコデモ (Nicodemus) 」とは、「ヨハネ伝」に登場するキリストを慕い支持したユダヤ人議員で、キリストから精神的復活についての説教を聞き (John 3.1-21) 、磔刑に処せられたキリストの遺体のもとに「没薬と沈香を混ぜたもの」 (John 19.39) を運んだ人物である。このように、ニコデモはキリストの復活と深い関わりのある人物なのである。また、リジーとユージー

ンの場合には、溺れかけているユージーンを救出する際のリジーの意識の描写に、“merciful Heaven”や“thy wonderful workings” (699) や“O Blessed Lord God” (701) という言葉が頻出し、神の意志や神の存在が強調されている。

4 人の主人公の変化には再生や復活のイメージが与えられているうえに、ポッフイン氏やリジーの意識の描写を通して、宗教的意味合いがさらに強調されている。このことは、一見すれば、彼らの変化が神意や神の力によるものであることを伝えているようにも思われる。しかし、そのように単純に解釈するべきではない。というのも、この小説でキリスト教に関する言葉が使われるとき、その言葉は神意や神の存在ではなく、それを信じる心やそこから生じる利他心や他者への愛情を想起させるものとして用いられているからである。宗教的な言葉がこのような役割を持っているからこそ、ポズナップ氏やフレジビーの次のような描写が皮肉として成立している。

社交界の代表的人物であるポズナップ氏は、しばしば「神意 (Providence) 」という言葉を使う。例えば、彼は「神意の意味するところは必ずポズナップ氏の意味するところである」という非常に「都合の良い」考えを持っている (129) 。そして、最近路上で餓死した人間が数人発見されたという話題が出ると、「責められるべきは餓死者たち本人であり」、「神意の行くところに異議を唱えるつもりはない」と主張する (141) 。善人の仮面を被った強欲で無慈悲な金貸しのフレジビーの描写にも、宗教的な言葉が多用されている。負債者たちから容赦なく搾り取ってやると断言した後に、彼は外出のために普段の気の良い粋な紳士の服装に着替える。その様子は、彼は「キリスト教徒の服装 (Christian attire) 」に着替え、「お清め (ablutions) 」をし、「聖油を塗り (his anointing of himself) 」外出していったと語られる (432) 。両方の場面では、ポズナップ氏とフレジビーの利己心や無慈悲が皮肉られ、非難されている。これらの描写が批判的な意味を持つのは、この小説では神やキリスト教に関する言葉が想起させるものが利他心や慈悲深さを本来意味しているからである。

だとすれば、4 人の主人公の変化が宗教的なイメージで描かれているのは、それらが神意や神の力によるものであることを示すためではなく、ジョンとベラやユージーンとリジーがお互いに抱いたような利他的な愛情や思いやりによるものであることを伝えるためだと言える。実際に、ジョンは「現在私が持っているものは全て、ポッフイン夫妻の無欲さと正直さと優しさと善良さのおかげだ」 (788) と言い、自分が新たなジョンとして復活できたのはポッフイン夫妻の思いやりに溢れた心のおかげだと述べている。ディケンズは、

人間の心や感情の持つ力の偉大さを説いている。

本論文で考察してきたように、ディケンズは、主人公たちの遺伝との闘争の物語を通して、遺伝に対する意志の優勢と彼らの変化における感情や心の影響力の大きさを説いた。特に、宗教的なイメージを用いながら個人を変化させる感情や精神の力について語る時、フルウィーラーが言うように神の法則説に与している (74) とまでは断言できないが、ディケンズは、個体の変異 (個人の変化) における心の重要性和大切さを訴えている。

一方、ダーウィンは彼の進化論において、神がそれぞれの生物を創造し、自然界は神の法則に基づいてある目的に向かって進化しているという従来の進化論を否定した。ダーウィンは自然界と進化から、神などの超自然的な力を排除したのである。その代わりに、彼は「生存闘争」と「自然選択」を提示した。「自然選択」説とは、「生存闘争」のなかでは「環境」への適応により有利な変異を持つ個体が生存する機会を得るので、有利な変異が「遺伝」によって種のなかに蓄積されて行き、この変異の蓄積が新たな種を生むという考えである。ここでは、人間をも含む個体の存在は、ただ「環境」と「遺伝」のみに決定されて左右され、その個体の「自由意志」が影響力を持つことはない。ラマルク (Lamarck) の「向上への傾向」や「動物のゆっくりと働く意志による適応」を「戯言」と批判しているように (*The Life and Letters* vol.1, 384)、ダーウィンは進化の要因としての個体の自由意志や努力を退けた。そして、この理論が西洋の伝統的立場に対してラディカルな挑戦であった理由を、グールド (Gould) は、ダーウィンは一貫して「唯物論哲学」を適用し、彼の理論では「心も精神も神でさえもニューロン (神経細胞) の複雑さの驚くべき結果を表現する言葉に過ぎない」 (17) からだとする。実際に、当時のナチュラリストたちによるダーウィンへの攻撃の背景にあったのは、一般的に、「ダーウィニズムの唯物論的世界観への嫌悪」だった (Bowler 187)。

ディケンズによる遺伝の絶対的影響力の否定と反唯物論的主張は、『種の起源』の主張と完全に対立している。しかし、これがディケンズのダーウィンの進化論への不賛同を示しているとは単純に解せない。というのも、ダーウィニズムは「本質的に多義的」であり、『種の起源』におけるダーウィンの議論の仕方や隠喩の使い方は「意味の増殖と拡張」をもたらす性質を持っている (Beer 6-7) からだ。実際に、ダーウィンの比喩表現は誤読を誘うほどのものだった。例えば、ダーウィンは、神や超自然的な力を否定していたにも拘わらず、『種の起源』のなかで生物の始まりを「生命が最初に吹き込まれた (life was first

breathed) ある原始形態」(455)と表現している。驚くべきことに第2版では、彼は「創造主によって (by the Creator) 吹き込まれた」(Peckham 753)と加筆している。これに対して、ディケンズの雑誌の『種の起源』の書評“Natural Selection”は、「創造主によって生命が最初に吹き込まれた」というこの件をそのまま紹介している(294)。この書評は、ダーウィンの表現から、彼の進化論に神の存在を読み取ってしまっている。それゆえ、ディケンズによるダーウィンと相対する主張は、彼が『種の起源』のレトリックの網に捕えられてしまったためだとも考えられる。しかし『我らが共通の友』が、人間関係を捕食と被捕食の相互関係として描いている点で、表面的には『種の起源』と酷似した作品でありながら、個体(個人)の存在における感情や精神の大切さを説いているゆえに、本質的には『種の起源』と完全に相対する作品であることは確かである。ディケンズは『我らが共通の友』という彼独自の『種の起源』を書き上げたのである。

註

¹ 『種の起源』からの引用は、特に言及しない限り初版のテキストを収録している *The Origin of Species*, ed. J. W. Burrow からである。尚、1859年から1878年までの間にダーウィンが何度行った改訂増補については、Peckhamの集注版のテキストを参照した。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. 1990; Toronto: Stewart House, 1991.
- Beer, Gillian. *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction*. 1983; Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Bowler, Peter J. *Evolution: The History of an Idea*. 1983; Berkeley: California UP, 1989.
- Cotsell, Michael. *The Companion to Our Mutual Friend*. London: Allen & Unwin, 1986.
- Darwin, Charles. *The Life and Letters of Charles Darwin*, 2 vols. Ed. Francis Darwin. New York: D. Appleton, 1888.
- . *The Origin of Species*. Ed. J. W. Burrow. Harmondsworth: Penguin Books, 1968.
- Dickens, Charles. “Natural Selection.” *All the Year Round* 3 (7 Jul. 1860): 293-99.
- . *Our Mutual Friend*. Ed. Michael Cotsell, Oxford World's Classics. Oxford & New York: Oxford UP, 1998.
- Flint, Kate. “Origins, Species and Great Expectations.” *Darwin's The Origin of Species: New*

- Interdisciplinary Essays*. Ed. David Amigoni and Jeff Wallace. Manchester: Manchester UP, 1995. 152-73.
- Fulweiler, Howard W. “‘A Dismal Swamp’: Darwin, Design, and Evolution in *Our Mutual Friend*.” *Nineteenth-Century Literature* 49.1 (1994) : 50-74.
- Gindele, Karen C. “Desire and Deconstruction: Reclaiming Centers.” *Dickens Studies Annual* 29 (2000) : 269-301.
- Gold, Joseph. *Charles Dickens: Radical Moralizer*. Minneapolis: Minnesota UP, 1972.
- Gould, Stephen Jay. *Ever Since Darwin: Reflections in Natural History*. 1977; Harmondsworth: Penguin Books, 1980.
- Levine, George. *Darwin and the Novelists: Patterns of Science in Victorian Fiction*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1988.
- マルクス, カール. 『マルクス = エンゲルス全集第 30 巻 書簡集 1860-1864』. 大内兵衛・細川嘉六監訳. 大月書店, 1972.
- Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958.
- Morgentaler, Goldie. *Dickens and Heredity: When Like Begets Like*. Basingstoke: Macmillan Press, 2000.
- Peckham, Morse, ed. *The Origin of Species by Charles Darwin: A Variorum Text*. Philadelphia: Pennsylvania UP, 1959.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens: Resurrectionist*. New York: St. Martin's Press, 1982.
- 『中部英文学』24号 (日本英文学会中部支部, 2005年3月31日) : 15-27.